

この福音書における洗礼者ヨハネとイエスの出会いの記事は、イエスが彼から洗礼を受けた記事もなく、彼のイエスについての証言だけに限られています。イエスが自分の方に来るのを見て、彼が「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言ったと記されています。今復活させられて私たちと共に働いているイエスは、実に「世の罪を取り除く神の小羊」として地上に現れ、その生涯を送られたのだと、洗礼者ヨハネは証言するのです。この一言はイエスの生涯の意義の総てを言い表しています。イエスの十字架上の死が過越の小羊としての犠牲であることは、どの福音書にも記されていますが、この福音書は特にイエスの十字架の死が神殿で過越の羊が屠られる時であったと記すことで強く印象づけています。また、この世の罪を背負い取り除くための犠牲の小羊は、私たちが用意して献げる犠牲ではなく、神さまが備え、与えてくださった犠牲の小羊であり、「神の小羊」と呼ばれています。30 節の言葉は、イエスと自分はどちらが先に生まれたのか、ということを行っているではありません。ここでは、神さまの計画においては先に存在が決められていた神の独り子だと言っているのです。そして、先におられた方であるゆえに「わたしよりも優れている」と断言するのです。そのことは、27 節の「わたしはその履物のひもを解く資格もない」という表現でも示されています。32 節は彼がイエスに洗礼を授けた時のことです。この福音書は洗礼者ヨハネの証言によってイエスに聖霊が降ったことを伝えます。そして、33 節に記されていますように、彼がイエスに聖霊が留まるのを「見る」ことによってイエスを「知る」に至った、聖霊が彼にイエスの本質を見させ、イエスが誰であるかを理解させたのです。

「見よ、世の罪を負う神の小羊」で始まる洗礼者ヨハネの証言全体(29～34 節)が、「聖霊が降って、イエスに留まるのを見た」後の見たゆえの証言です。イエスが神の子であってはじめて、その十字架の死が「世の罪を負う神の小羊」となるからです。イエスは、彼から洗礼を授かった時、聖霊によって神さまと繋がっており、神の子であることが示されました。しかし通常、洗礼とは、神さまを信頼し、神さまに身を委ね、共に歩むことを決心した人が、罪の赦しの宣言を受け、神の子となるための儀式です。それは、洗礼を受けることにより、聖霊によってイエス・キリストに、また、神さまに繋がっていることを、確認することが出来るのです。そして、神さまは聖霊を通して、常に私たちと共にいて、共に歩んで下さいます。だからこそ、祈れば、神さまは必要を満たして下さいます。試練をも乗り越える力を備えて下さるのです。